連載コラム

第 61 回　シソ科の植物（2）
栽培種

もとよし　ふさお
本吉 總男　2021 年 3 月

（2021 年 6 月 4 日　追記）

前回はシソ科の野生種について述べましたが、今回はみずき野町内や周辺の花壇などでみられるシソ科の栽培種について紹介することにします。今回のタイトルを、「園芸種」としようか、「栽培種」としようかと迷いましたが、「園芸」より「栽培」の方が広い意味をもっているので、「栽培種」としました。

前回も書きましたが、シソ科の植物は例外を除いて、筒状の花の先が上下に分かれており、人の唇に喩(たと)えて、裂けた上部を上唇(じょうしん)、下部を下唇(かしん)と呼びます。

シソ科の植物は、アブラナ科やキク科の植物のような主たる野菜ではありませんが、芳香を発するものが多く、ハーブとして料理に添えられ、味や香りを楽しませてくれます。また、精製された香料の成分は、ケーキや飲料などにも加えられ、味を引き立たせます。ハーブにはシソ科以外の植物が多いのですが、シソ科のハーブにはスペアミント、ペパーミント、タイム、セージ、ローズマリー、バジル、オレガノなどがあります。

シソ科のハーブといえば、よく思い出すのは、イギリスの古謡で、サイモンとガーファンクルが歌って世に広まった「スカボロフェア(Scarborough Fair)」に挿入されているリフレイン「パセリ、セージ、ローズマリー、アンド タイム (parsley, sage, rosemary, and thyme)」です。歌詞の主題とは直接関係なく、おまじないのように聞こえますが、これらのハーブは西洋人にとってとりわけなじみ深いものなのでしょう。パセリはセリ科ですが、あとの3つはシソ科です。サイモンとガーファンクルが歌うスカボロフェアを YouTube に見つけたので、リンクしておきます。

ラベンダーもハーブの一種ですが、食用ではなく、それから精製されるラベンダー油が食品添加物としても、石鹸や化粧水への添加物としても使われます。ラベンダーは濃い紫の花が美しいので、観賞用にも植えられています。

前回紹介したシソ科野生種の多くはあまり目立つ花をつけませんが、栽培種は観賞用に使われることが多く、モナルダ、ハナトラノオ、サルビアのような目立つ花をつけるものがあります。残念ながらみずき野の花壇にモナルダは見かけたことがありません。

今回は、シソ科の代表種であるシソについて述べるとともに、みずき野町内の花壇に咲くシソ科植物について書くことにしました。

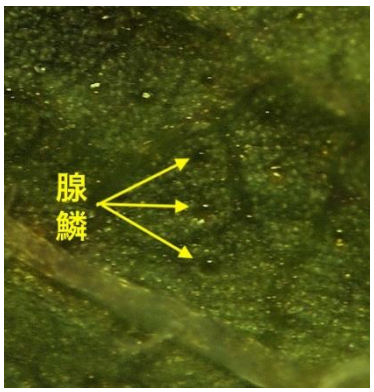
1　シソ

シソという名は、アカジソ、アオジソ、チリメンジソなどの総称です。これらは、学名でいうとすべてペリラ・フルテセンス(Perilla frutescens)という種に属していますが、それぞれ異なる変種（種や亜種より下の分類基準）とされています。前回紹介したエゴマもシソと同一種で、シソの変種です。いずれにせよ、葉や色や香りに違いはあれど、それぞれがごく近縁であることを示しています。さらにそれぞれの変種からいろいろな栽培品種が育成されているようです。

シソの原産地はヒマラヤ、ミャンマー、中国です。シソは中国で古くから食用または薬用に栽培され、日本には古い時代に中国より渡来し、福井県鳥浜の縄文時代前期の層から種子が採掘されたという報告があるそうです。しかし、薬用や食品香味料として渡来したことが明らかなのは奈良、平安時代で、各地で栽培されたようです（週刊朝日百科「植物の世界」20号）、週刊朝日百科「世界の植物」14号、大久保増太郎『日本の野菜』（中公新書）から引用）。

シソには前述のように、アカジソ、アオジソ、チリメンジソなどがあり、それらの利用法は多少異なりますが、シソ全体として見ると、日本の代表的なハーブのひとつです。ハーブとしての使い方は多様です。シソには殺菌作用があり、古くから薬用として使われたようです。

食品としては、「大葉」と通称されるアオジソの葉がよく使われ、和風料理では、味付けや香り付けによく使われます。料理には詳しくないのですが、ネット上には、和食だけでなく、洋食にシソを使う料理がかなり多く紹介されています。栽培されているアオジソの写真は撮っていなかったので、販売品のアオジソの葉（大葉）の写真を載せておきます。大葉の裏側には写真に示すような腺鱗という小さな袋状の器官が散在しています。腺鱗には香りの成分が含まれています。腺鱗はシソに限らず、匂いを放つ多くの植物に存在します。



アオジソの葉（大葉）販売品　　左：表　　中：裏　　右：裏を拡大（矢印は腺鱗を示す）

アカジソは灰汁（あく）が強くて、アオジソのように、葉菜（ようさい）としてはあまり食べないようです。ただし乾燥して粉末にしたものはご飯のふりかけとして使われます。「ゆかり」という名でよく知られていますが、この名は食品会社の登録商標で、一般名ではありません。アカジソの葉は主として、梅干しの色付けに使われます。

アカジソの外観

チリメンジソの特別な利用法は不明ですが、葉はしわが多いけれど、葉の色はアカジソと同様なので、アカジソと同じように利用されているのかもしれません。週刊朝日百科「世界の植物」14号には、貝原益軒『大和本草』（1709）に、「薬用のものは芳香が佳良で、葉の裏表とも紫色を呈し、ちりめんのものがよく、新鮮なものを使う」とあり、これは現在のチリメンジソとされていると書かれています。

アカジソの花 9月下旬 本町地区

シソは家庭菜園に植えておくと、翌年はこぼれ種から生えてきます。かなり生育の活発な植物なので、野に自生しているものもあるかと思いますが、みずき野周辺では自生しているものは見たことがありません。写真のアカジソは、畑の端に植えられていたものです。

2 サルビアの仲間

サルビアの仲間には、サルビアと呼ばれているものと、セージと呼ばれているものがあります。サルビアと呼ばれているものは主として観賞用に用いられ、セージと呼ばれているものにはハーブとして利用されているものがありますが、観賞用に栽培されるものも含まれています。

サルビアは学名をサルビア・スプレンデンス (Salvia splendens)という観賞用に栽培される植物です。原産はブラジルですが、1822年にヨーロッパに導入され、日本には明治の中頃入ってきたそうです（週刊朝日百科「世界の植物」14号）。サルビアの花は赤が普通ですが、白やピンクの栽培品種もあります。

サルビアと名のつく植物には、ほかにソライロサルビア、ベニバナサルビア、ムラサキサルビアなどがありますが、みずき野町内や周辺では見たことがありません。

サルビア 7月上旬 郷州小学校西側花壇

ハーブとしてもっともよく使われるタイムやセージ（コモンセージ）はみずき野町内や周辺では見たことがありませんが、セージと名のつくものとしては、チェリーセージとラベンダーセージが花壇を飾っています。

チェリーセージは，みずき野町内の花壇によく見かける植物です。上唇（じょうしん）は筒状、下唇（かしん）は直径2センチほどの可愛らしい花をつけます。多年生の植物で、茎は、若い苗では草状ですが、生長すると木質化します。したがって、チェリ―セージは木本（もくほん）と考えていいかと思います。茎の高さは70～80センチ前後です。

みずき野文化財公園石垣下花壇

みずき野第1調整池花壇
上・下段ともにチェリーセージ 10月上旬～10月下旬

日本でチェリーセージと呼んでいるのは、次の3種の総称です。3種の学名は、サルビア・グレッギー(Salvia greggii)、サルビア・ミクロフィラ (Salvia microphylla)、サルビア・ヤメンシス (Salvia x jamensis)といい、いずれもメキシコに原産しています。サルビア・ヤメンシスは、サルビア・グレッギーとサルビア・ミクロフィラとの自然交雑によってできたものです。学名の中に「x」という文字が入っていますが、これは雑種であることを示しています。これら3種の交配によっていろいろな栽培品種もつくられているようですが、日本ではそれらもチェリーセージと呼んでいます。

ただし、欧米ではチェリーセージという名称は上記3種の総称ではなく、サルビア・グレッギーに与えられた名称です。欧米では、それぞれの種に別個の名がつけられています。サルビア・グレッギーはチェリ―セージまたはオータム・セージ、サルビア・ミクロフィラはベイビー・セージまたはマウンテン・セージなどと呼ばれ、サルビア・ヤメンシスは、発見された土地の名ハメイ(jame)から、ハメイ・セージと呼ばれているようです。

写真はみずき野町内で撮したものですが、変種名や栽培品種名ははっきりわかりませんので、いずれも総称のチェリーセージとして載せておきます。チェリーセージは花期が長く、5月ごろから初冬まで花が見られます。

次の写真で示すセージの花は青紫色で、上唇(じょうしん)が長いので、最初、メドウセージと思いましたが、よく見ると花の形がメドウセージと異なっています。メドウセージの画像はもっていないので、「メドウセージ」をキーワードにネット上を検索してみてください。

下記の写真のセージは上唇(じょうしん)の表面に細かい毛状の突起が多数見られますが、メドウセージであれば上唇(じょうしん)の表面はなめらかです。またよく見ると、上唇(じょうしん)の先端から突き出している雌しべの先端が上向きに曲がっていますが、これはチェリーセージに見られる特徴です。一方、メドウセージでは雄しべの先端は下向きに曲がります。また下記の写真のセージでは下唇(かしん)の形はチェリーセージと同様で、メドウセージとは異なっています。これらの特徴からこれもチェリーセージと判断しました。

ラベンダーセージは、欧米ではインディゴ・スパイアーズ(Indigo spires)と呼ばれている植物で、メキシコ原産のサルビア・ロンギスピカータ(Salvia longispicata)とサルビア・ファリナセア(Salvia farinacea)という2種のサルビアの自然交雑種です。

メドウセージに似たチェリーセージ
11月上旬 バス停「みずき野野球場」付近の小花壇

ラベンダーセージ　11月上旬
みずき野第1調整池花壇

花の外観はチェリーセージに似ていますが、花色が多彩なチェリーセージと異なり、花はもっぱら青紫色です。下唇（かしん）には一対の白い斑点があります。萼（がく）の形もチェリーセージとは異なっています。花は夏から初冬まで咲きます。

ローズマリーという名でよく知られている植物の正式の和名（標準和名）はマンネンロウです。マンネンロウの語源は諸説あり、はっきりしません。漢字では中国語の「迷迭香」を当てていますが、これでマンネンロウとはとても読めません。マンネンロウの原産地は、地中海沿岸ですが、ヨーロッパでは広く薬用、香料として古くから栽培されてきました。中国へは漢から魏の頃、ローマ帝国からシルクロードを経て伝わったそうなので、これまた古い話です（加納喜光『植物の漢字語源辞典』東京堂出版）。日本には江戸時代後期に中国から渡来したそうです。

標準和名とはいえ、マンネンロウという名はあまり馴染みがないと思うので、以下、ローズマリーというよく知られた名称を使うことにします。

10月上旬 みずき野文化財公園石垣下花壇　茎は直立性、花色はピンク

11月下旬 みずき野8丁目道路沿い植込み　茎は匍匐性、花色は淡紫色
上・下段ともにローズマリーの外観（左）と花（右）

ローズマリーは常緑の低木で、茎が直立する品種と匍匐（ほふく）性（横に広がる）の品種があります。葉は細く、花の色は通常淡紫色ですが、淡いピンクや白色のものもあります。ローズマリーは以前、学名をロスマリヌス・オフィシナリス（Rosmarinus officinalis)といい、マンネンロウ属の植物とされていましたが、最近、サルビア・ロスマリヌス（Salvia rosmarinus)と変わり、サルビア属の仲間に入りました。

3 ハナトラノオ

茎の横断面が四辺形なのでカクトラノオとも呼ばれますが、ハナトラノオが標準和名です。北米原産の多年草で、茎の高さは80センチ内外、7月から10月頃まで花を咲かせます。花の色はピンクで、濃いものと淡いものがあります。また白色の品種もつくられています。繁殖は旺盛で、地下茎によってよく増えます。ハナトラノオは北米から17世紀後半にヨーロッパに入り、日本には大正年間に渡来したそうです。

ハナトラノオ　9月下旬
みずき野文化財公園石垣下

4 その他のシソ科栽培種

観葉植物のコレウスもシソ科の植物です。コレウスついては第49回「葉の変異：斑入りなど」で説明と写真を載せてたので、参照してください。園芸では普通コレウスまたはコリウスと呼んでいますが、標準和名はキランジソといい、別名としてニシキジソともいいます。

フレンチラベンダー　4月下旬
みずき野中央公園ひろば

ラベンダーは地中海沿岸が原産地ですが、ヨーロッパで広く栽培され。香料として利用されています。ラベンダーにはいろいろな品種がありますが、イングリッシュラベンダーやフレンチラベンダーなどが著名です。みずき野ではあまりに見当りませんが、中央公園のひろばで

フレンチラベンダーを見ましたので、写真を撮りました。花は穂の側面に初夏から夏にかけて咲きますが、写真は4月に撮ったものなので、花はまだ咲いていません。穂の先端にウサギの耳に似た苞葉（ほうよう）があるのがフレンチラベンダーの特徴です。

コムラサキはムラサキシキブに似た紫色の実をつける低木です。本来は野生種なのですが、野生のものは少なく、公園や庭などにはよく植えられていますので、栽培種と考えていいと思います。コムラサキは以前クマツヅラ科の植物とされていましたが最近シソ科の植物に変更されました。コムラサキには実の白い品種があり、シロミノコムラサキと呼ばれています。コムラサキとシロミノコムラサキは残念ながら花の写真をもっていませんが、実の写真はムラサキシキブとともに、第19回「木の実いろいろ(1)」に載せています。

野生種のハッカは前回で述べたようにシソ科の植物ですが、栽培種で西洋ハッカと呼ばれているスペアミントやペパーミントもシソ科の植物です。これらの西洋ハッカと思われる植物を散歩道で見たことがあります。しかし、まだはっきり判別できていません。いずれ、はっきりさせたいと思っています。また、メドウセージに出会うことも期待しています。

追加（訂正）2021年6月2日

本稿を掲載したのちに、一部記述に誤りがあることがわかりました。

5ページの写真の下段右の植物は、チェリーセージではなく「サルビア・コクシネア」、また6ページの２枚の左写真の植物もチェリーセージではなく「サルビア・メキシカーナ」という植物です。

詳細はこちらをご覧ください。